

アイス・キャンデーに西瓜そしてココア

中田佐知子、三十八歳の初夏、これから朝食、午前九時四十五分。食卓に向かってひとり椅子にすわっている佐知子は、そんな言葉を頭のなかにならべてみた。いまこの瞬間の自分を言いあらわすには、このくらいの言葉で充分に間に合う、と彼女は思った。

一杯の熱いココアを作ったばかりだ。コーヒー・マグに満ちてそれは彼女の目の前にある。ココアの粉はヴィニールの袋に詰めてあり、それが紙の箱に入っていた。保存用のガラス瓶に彼女は詰め替えた。瓶がちょうど蓋までいっぱいになった。マグを持ち上げ、彼女はココアを飲んだ。たいへんいい、と彼女は思った。これまででいちばんおいしいココアではないか。

無理がまったくない。きわめてすんなりとした、素朴な味わいだ。そしてそれゆえに、味わいの奥は深い。しばらくのあいだ、中田佐知子はほぼ無心にココアを飲んだ。そしてマグをテーブルに降ろした。持ちにくいマグだ、と彼女は思った。かたちもそして模様も、自分ではまず選ぶことのないものだ。

兄が所有しているこの家には、留守番の代わりだと兄が言う、中年の夫婦が住んでいる。ふたりとも公務員だ。この一週間、佐知子はここに居候してきた。今日、これから朝食を食べたあと、東

京に向けて出発する。中年の公務員夫婦はすでに仕事に出た。見送れなくてごめんねと、奥さんのほうがしきりに済まながった。すぐ近くに路線バスの停留所がある。そこからバスに乗れば在来線の駅に着く。ただそれだけのことだ。

さらにココアを飲みながら、これから自分で作る朝食について、佐知子は思った。トースト。このパンにはバターがよく合う、と奥さんは言った。卵もおいしいのよと、二個、出しておいてくれた。スクランブルド・エッグスにするか。ベーコンがある。これもおいしい、と奥さんは勧めた。水から茹で、スクランブルド・エッグスに添えて、トマト・ケチャップにタバスコか。苺と生クリーム。大ぶりでまっ赤なこの苺に関しては、さっちゃんのような美人に食べてもらえて幸せね、と奥さんは言った。

ココアのあと、こういった朝食を自分は作るのだが、まず苺を食べてはどうか、と佐知子は思った。苺に生クリームを充分にかけ、底の平らなスプーンでまんべんなくつぶす。この三温糖がびつたりよと奥さんは言い、砂糖壺を苺のかたわらに置いた。三温糖をふりかけ、よくかきまぜ、スプーンですくって口へ運ぶ。

その味と感触を想像しながら、苺のあとはコーヒーか、と彼女はほんやりと思った。コーヒーとともにバター・トースト。ベーコンとスクランブルド・エッグスは、サンドイッチにして持って出るといいのではないか。やがてココアを飲み終えた彼女は、考えたとおりに朝食を作り、ひとりでゆっくり食べた。食器をすべて洗い、サンドイッチはジップロックに入れ、ココアの瓶はバッグに

しまった。そしてお礼のメモを一枚、テーブルに残した。

一泊か二泊の小旅行に使う黒いナイロンのバッグに、すべての荷物は納まった。シオルダー・ストラップでそれを肩にかけ、中田佐知子はその家を出た。玄関のドアはオート・ロックだった。ドアの前に立ち、すべての戸締りについて、彼女は思った。ガス台の火は消した。佐知子の兄は県庁所在地であるこの町に住み、消防署員をしている。火を消したか、というひと言は、消防署に勤務する以前からの、兄の口癖のひとつだった。

家の敷地を出て、歩道をバス停まで歩いた。きっちりではないが、バスの時間に合わせた。だからバス停で待つほどもなく、バスが来た。それに乗って彼女は乗車賃を硬貨で支払った。駅まで、という彼女のひと言に、運転手は小さくうなずいた。バスは空いていた。彼女は席にすわった。バス停は後方へと去り、景色のすべてがうしろへと流れ続けた。景色になじみはほとんどなかったから、ここをこのようにして去ることに關しても、感慨はなにもなかった。

一週間前、ここから自動車で三十分ほどのところにある食堂、そしてその裏にある実家をあとにしたときには、佐知子の胸中にさまざまな思いが錯綜した。生まれ育った実家だ。東京の大学にいくまで、佐知子は父母とともにその家に住んだ。兄が独立するまでは、兄もいっしょだった。

中田佐知子は母親が三十歳のときの娘だ。大学では写真を勉強した。卒業してそのまま東京で仕事をした。主として雑誌の世界でフリー・ランスで写真を撮った。そして彼女は文章も書くことが出来た。容姿と容貌に恵まれているから、急場には写真のモデルを務めることも出来た。いろんな

意味で重宝な存在であり、したがって仕事は多く、彼女は常に多忙だった。

卒業してから五年間があつと言う間に過ぎ去り、二十八歳になってすぐに父親が他界した。父親は佐知子が生まれる以前から、おなじ場所で食堂を営んできた。兄は消防署員で、残るのは母親しかない。だから佐知子は実家へ帰り、ひとまずは食堂を継ぐことにした。閉業の話もあったのだが、佐知子はそれに反対した。東京で日夜こんなに忙しい自分はいったいなにをしているのか、という思いが胸のなかに立ち上がり始めてもいたから、実家へ戻ることにきめてしまうと、東京での生活に未練はさほど残らなかった。

大学生のとき、佐知子は調理師の免許を取得した。父親に代わって母が食堂に立つにしても、手伝える人はかならず必要だ。私がやるから、と母は言った。しかし佐知子は実家へ帰った。母を助けて食堂はうまく回転していく日々が続き、それから五年後、佐知子が三十三歳のとき、母が急死した。食堂はもう閉めよう、と兄は言った。店の客はまだ充分にあったとは言え、テイクアウトが増えてもいた。あらかじめ作っておくテイクアウトだ。注文は多くが電話によるものだった。

母の死後から五年間、佐知子は食堂を続けた。大学を卒業して五年後に父親が他界し、それから五年後に母が亡くなり、そこからさらに五年が経過した。合計することに意味はなにもないが、あれから早くも十五年かと思うと、もういいかな、という思いへと、やがて無理なくつなげた。兄もおなじ意見だった。ある日の夕方、食堂にひとりであらわれ、カウンターで客として夕食を食べたのち、三杯目のコーヒーのあと、言いにくそうに閉店を提案した。その提案を中田佐知子は受け

た。三十八歳の春先のことだ。

個人的な知り合いのなかから選んだ人たち十数名に、食堂の閉店を知らせる葉書を出した。まだ閉じてはおらず、いまま営業中だが、三月十五日をもって閉店します、という簡単な文面の葉書だ。大学で写真を学んだ四年間の同期生、河本浩平という男性から、反応の電話があった。彼は大学を卒業したあと、高名な写真家のアシスタントの職についた。助手として、写真だけではなくそれ以外の領域においても、男が引き受けるべき雑用すべてをこなす、という職だ。数年後に独立し、いままも写真家として仕事を続けていた。

「そうか、閉店するのか」

電話の向こうで河本は言った。

「ひとりどこまで頑張ったのか」

「ひとつの節目を迎えたのかな、とも思うから」

「節目はその先へと越えていけばいい」

「そのとおりね」

「食堂へは、一度だけ、いったことがあるよな」

「私が二十八のとき」

「よく覚えてるよ」

「私が東京からこちらへ戻ってすぐに、あなたから電話があったのね」

「撮らせてくれ、と僕は言った」
「私を」

「まさに、そのきみを。中田佐知子を。これは絶対にサチだ、と僕は確信した。追憶の夏、という題名の写真展に出展する作品を、きみで撮りたいと僕は思った。プッシュピンという名のギャラリーで、いまでもあるんだ。なぜか盛業中だよ。人気がある。そのギャラリーを根拠地のようにして、二十人の会、という写真団体があって、僕は学生の頃にメンバーになった。その二十人の会の、ギャラリー・プッシュピンにおける写真展のテーマが、追憶の夏、というフレーズだった」

「話を聴いてると、忘れてることを思い出すわ」

「いまから十年前」

「あっと言う間なのね」

「あれから十年とは、まいったな」

「と言ってしばらく無言でいた河本は、

「プッシュピンとは、押しピンのことだよ」

と言った。

「世界じゅうの押しピンが集めてあつてね。壁はすべてコルク・ボードだから、写真は押しピンで留める。それがいいのかな。その気やすさが。いまでは広くなって、絵葉書が人気だよ。プッシュピン・ポストカード・シリーズ。絵葉書としてプリントされたものが、店の奥にあるいくつかの専

用ケースに入っていて、いつ見ても人がいて絵葉書を選んでるよ。十年前に中田佐知子をモデルにして撮ったあの追憶の夏の写真も、ポストカードになっている。一年で五十枚は売れる」

「十年で五百枚ね」

「そのくらいは、いってる。懐かしいなあ。車を飛ばして、そこへいったっけなあ。食堂で食事をしたよ。お袋さんにも会ったし。すぐ裏が実家だよな」

「そうよ」

「食堂を閉めて、中田佐知子はどうするんだ」

「どうしよう」

「お袋さんが亡くなったときには、葬式にいけなかった。食堂は、いまはまだ、営業してるのか」

「してるわよ」

「よし、僕はそこへいくよ。食わせてくれ。いま思い出した、海老フライが、なぜだかものすごくうまかった」

「近くの漁港にあがる海老よ。フライではなかったでしょう」

「そうだ、アメリカン・ソースのような」

「洒落た味を出すのが、母は上手だったわ」

「僕はそこへいく」

「ほんと？」

「中田佐知子のその声で、ほんと？　と言われたら、とことんほんとでいくほかない」

河本の言いかたに佐知子は淡く笑った。

「明日、車でここを出る。朝、出る。午後のまだ早い時間には、そこに着く。食堂にいてくれ」

父親が他界して佐知子が東京から実家へ戻った二十八歳の夏、写真を撮らせてくれと言って河本浩平は東京から自動車で来た。食堂でいつものように仕事をしながら待っていたら、佐知子が想像していたとおりの四輪駆動車が、食堂の向かいにある駐車場に停まった。運転席から河本が降りるのを、佐知子は壁の窓越しに見た。

食堂へ入って来た河本浩平は、カウンター越しの佐知子を相手に、積もる話をひとしきりした。そのあと、

「写真のモデルになってくれ」

と、言った。

「このモデルはサチしかあり得ない。画廊で開く展覧会に出品する写真だ。一点だけ。ワン・ショット。とても簡単。突っ立っていてくれれば、それでいい。全身ではなく、腰から下。向かいの駐車場の端に、コンクリート敷きの傷んでいる割れ目から、夏草の生えているところがある。あのあたりが、まさにイメージどおり、最適だ。あと一時間で、光の加減はどんぴしゃりになる」

黒いミニ・スカートを持っているか、と河本は佐知子に訊いた。佐知子は首を振った。

「僕が持って来た。腰まわりのサイズを電話で訊いたのは、そのためさ。黒いパンプスも用意した。」

サイズは、これもきみが電話で言ったとおり、二十四・五。いま車から持って来るから、ちょっと身につけてみてくれないか」

そう言つて河本は食堂を出た。道を横切つて駐車場へ歩く彼を正面の壁にある窓ごしに見ながら、佐知子はカウンターの外に出た。ドアまで歩いて外に出て、そこで河本を待った。黒いミニ・スカートと黒いパンプスを持って、夏の陽ざしのなかを河本はドアの前の佐知子まで戻った。

「裏に実家があるから、そこではいてくるわ」

スカートとパンプスを彼女は受け取り、食堂の角を曲がつてその裏にある実家の建物へ歩いた。河本はふたたび道を渡り、駐車場の端へいった。

中田佐知子はすぐにあらわれた。ミニ・スカートとパンプスは彼女にびったりで、そのことに河本は驚嘆した。

「おおげさでもなんでもなく、腰から下は見たこともない別人だよ。まさにモデルだ。女優と言つてもいい」

と、河本は言つた。

コンクリート敷の駐車場の端に、さきほど河本が言つたとおり、コンクリートのひび割れから夏草の生えている部分があり、河本はそこに佐知子を立たせた。

「太陽の光に体を向けて。こんなふうに、両脚を開きぎみに。足を踏んばつて、まっすぐに突つ立つ。そう、それでいい。あと三十分ほどで、光は完璧」

ふたりは食堂に戻り、河本は二杯目のコーヒーを飲んだ。

「あそこに私が立ってるだけの写真でいいの？」

ほんのりと疑問に思つたことを、佐知子は質問にしてみた。

「いい質問だ」

と、河本は言つた。

「突つ立っている足もとのすぐ前に、西瓜を一個、僕が叩きつける。西瓜は割れて飛び散るだろう。その様子を取り込んだ上での、きみのミニ・スカート姿の腰から下」

「西瓜は、ここにはないわよ」

「買って来た。二個。車にある」

時間は穏やかに経過していき、河本が言う最適の光が、駐車場のぜんたいを西から斜めに照らすようになった。

「よし、いこう」

ふたりは食堂を出た。道を越えて駐車場に入り、河本は車から写真機と西瓜を取り出した。一眼レフを肩にかけ、西瓜を駐車場の端まで持つていった。

「さっきとおなじように、そこに立つてくれ」

と、彼は佐知子の立つ位置を示した。

佐知子は言われたとおりに立ち、河本は構図をきめた。

「よし、これでいい。二、三メートル、下がっていきたくないか。西瓜を叩きつけて割るから。飛び散るはずの西瓜の汁や破片を、きみの脚が受けないように」

佐知子は位置を変え、河本は西瓜を持ち上げ、狙いを定めたところに向けて、力を込めて西瓜を叩きつけた。西瓜は重く湿った音とともに、割れて碎けて飛び散った。佐知子を所定の位置に立戻させた河本は、西瓜の破片の位置を少しだけ修正した。そして彼女の正面にまわり、一眼レフのフリンダーごしに構図を点検し、

「完璧とはこのことだ」

と言った。

「撮るよ。立ちかたに気合を入れてくれ。さつきも言ったとおり、ほんとにワン・ショット。シャッター・ボタンを押し下げるのは、一回だけ」

河本浩平は一回だけシャッター・ボタンを押し、

「はい、これで完成」

と言った。

「これが追憶の夏なの？」

「そうさ」

河本は答えた。

「プリントは送るよ」

飛び散った西瓜はふたりで食堂へ持っていき、佐知子が洗って切りなおし、ふたりで食べた。深い甘さのある、良く出来た西瓜だった。

「予備にもうひとつ買ったけれど、それもおなじ味かなあ」

「きつとそうでしょう」

「東京へ持って帰る」

という河本の言葉に、佐知子は淡く微笑した。

その日、河本は、町の旅館に泊まった。次の日、早めの昼食を食堂で食べた彼を、佐知子は海へ案内した。彼の四輪駆動車で二十分ほどのところに、子供の頃の佐知子が夏には毎日のように泳いだ海があった。

浸食され続けた海岸はもはやほとんどなく、灰色の分厚いコンクリートの護岸壁が、その海の縁を城壁のように長く取り囲んでいた。車で走って来た道はその護岸壁で行きどまりとなった。駐車場になっっているところもあるのだが、それ以外はなににも使われていない、殺風景な空地だった。護岸壁の階段をふたりはその上へ上がった。護岸壁の外側は、かなり沖まで、投入されて久しいテトラポッドの重なり合いで、それが初夏の日の海を受けとめていた。

「波打ちぎわから海岸の終わるところまで、幅の充分にある広い海岸が、ずっと続いていたのよ」

「それがいまは、こうなのか」

「こうなのよ」